

- 河村幹夫『ドイルとホームズを「探偵」する』東京、日本経済新聞出版社、2009.
- 小林司、東山あかね『シャーロック・ホームズの推理博物館』、河出書房新社、2001.
- 小林司、東山あかね『シャーロック・ホームズの謎を解く』東京、宝島社、2009.
- シービオク, T. A. & J. ユミカー=シービオク『シャーロックホームズの記号論—C. S. バースとホームズの比較研究』富山太佳夫訳 東京、岩波書店、1994.
- 島高行「シャーロック・ホームズの魔術と詐術—二十世紀小説として『バスカヴィル家の犬』を読む」『実践英文学』62, 2010.
- 高山宏『殺す・集める・読む 推理小説特殊講義』東京、東京創元社、2002.
- 田中孝信「『四つの署名』におけるオリエントの誘惑」『人文研究 大阪市立大学大学院文学研究科紀要』第59巻、2008.
- 角田信恵「アイリッシュ・フランケンシュタインと「赤毛同盟」: コナン・ドイルとアイルランド問題」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編』50, 2011.
- 富山太佳夫『テキストの記号論』東京、南雲堂、1982.
- 富山太佳夫『シャーロック・ホームズの世紀末』東京、青土社、1993.
- 富山太佳夫『英文学への挑戦』東京、岩波書店、2008.
- 永松京子「探偵小説の変貌—Doyle から Christie へ—」『中央大学政策文化総合研究所年報』第3号、1999.
- 平賀三郎『シャーロック・ホームズ学への招待』東京、丸善株式会社、1997.
- 廣野由美子『ミステリーの間学—英国古典探偵小説を読む』東京、岩波書店、2009.
- ピアソン, ヘスキス『コナン・ドイル—シャーロック・ホームズの代理人』植村昌男訳 東京、平凡社、2012.
- マクドナルド, ロス『ミッドナイト・ブルー』小鷹信光訳 東京、東京創元社、2013.
- 宮地信弘「シャーロック・ホームズ—世紀末ロンドンの神話的ヒーロー—」『三重大学教育学部研究紀要』第50巻、1999.
- 山口和彦「伝説の幕開き:『シャーロック・ホームズの冒険』と『ストランド・マガジン』」『信州大学人文社会科学研究』4, 2010.
- ワグナー, E. J.『シャーロック・ホームズの科学捜査を読む—ヴィクトリア時代の法科学百科』日暮雅通訳 東京、河出書房新社、2009.

を果たしている。さらにワトソンは、ベル博士のように科学の実用性を示すような存在としてではなく、作者ドイルが経験してきた助手という立場から学んだ、常に寄り添って信頼を得て、相手の本音を引き出す特性をもった存在として描かれている。この2作の後、雑誌「ストランド・マガジン」に掲載されることになり、その物語は短編を中心に語られていくことになるが、短編の中では人物造形を行う余地がどうしても限られてしまう。いかにドイルの文体が短編に向くものであったとしても、短編ものだけでは、ホームズ物語の読者が抱いているようなホームズとワトソンに対する印象は生まれていなかったかもしれない。この2作を下敷きとして、人物像がある程度造形されていたために、ドイルは当時の人びとの要望に応えるように、短編でのホームズの活躍を描いたのである。

一次資料

Doyle, Arthur Conan., *Sherlock Holmes: The Complete Stories with Illustrations from the Strand Magazine*. Hertfordshire: Wordsworth Editions, 2006.

Hodgson, John A. ed., *Sherlock Holmes: The Major Stories with Contemporary Critical Essays*, Boston: Palgrave Macmillan, 1994.

ドイル, アーサー・コナン 『詳注版 シャーロック・ホームズ全集1～10』 小池滋
監訳 東京、筑摩書房, 1997～1999.

ドイル, アーサー・コナン 『わが思い出と冒険』 延原謙訳 東京、新潮社, 1994.

二次資料

Belsey, Catherine., *Critical Practice*, London: Routledge, 1990.

綾目広治 「シャーロック・ホームズの推理とは？—近代の光と影—」 『ノートルダム清心女子大学紀要 文化学編』 31, 2007.

植村昌男 『シャーロック・ホームズの愉しみ方』 東京、平凡社, 2011.

内田隆三 『探偵小説の社会学』 東京、岩波書店, 2001.

ウーズビー, イアン 『天の獵犬 ゴドウィンからドイルに至るイギリス小説の中の探偵』 小池滋, 村田靖子訳 東京、東京図書, 1991.

エンゲル, ユリオット 『世界でいちばん面白い英米文学講義—巨匠たちの知られざる人生』 藤岡啓介訳 東京、草思社, 2006.

オールティック, R. D. 『ヴィクトリア朝の緋色の研究』 村田靖子訳 東京、国書刊行会, 1993.

金子幸男 「ホームズと近代の監視・管理社会—フーコー的読解の試み—」 『西南学院大学英語英文学論集』 47, 2007.

たらした、という一節に続けて、「ドイルの物語にはポーのような深遠の探求も強烈な様式もない。ドイルの気分は穏やかにつろぎで、その目的は常に読者を安心させ、楽しませることである」（『天の獵犬』191）と述べているように、ホームズはポーの探偵デュパンとは異なったものとなっている。もちろん、それぞれの物語における名探偵自身の人物描写自体が、この物語の間の差異をもたらしている大きな要因であるのだろうが、いずれの物語においても、作者は物語中の人物としてその語り手を設定している。するとそこには、名探偵の活躍を記録するという役割は持ちながらも、物語中の人物として名探偵との関わりが生じてくるはずであり、その関係のあり方を見ていくことで、ワトソンに与えられた語り手以上の役割、人間性が見てとれる。

そこで、まず人物設定上目にとまるのは語り手ワトソンが医者であり、作者ドイルも医者の経歴をもつという点である。医者としてのワトソンにドイルが意図した側面をみていくと、ホームズとともに行動する活動的で教養を兼ね備えた姿が見てとれる。しかし、ドイルが学生時代に理想の医者像としてみた医術を実用的に用いるベル博士の姿がワトソンに反映されたというよりも、むしろホームズの側にその姿は反映されたようである。実用性という面はヒーローであるホームズに与えながらも、ワトソンには、その側に寄り添う立場に身を置き、信頼を得て観察を行う姿が見てとれるのである。

さらに、ホームズとワトソンを、作者ドイルの姿が投影された「名探偵／その非凡な友人」として見ていくと、二人にはドイルが分化して映し出されており、ドイルの姿はいずれにもみられるが、ホームズをヴィクトリア朝の社会不安を取り除くヒーローという存在としてみると、ワトソンには、当時の人びとの持っていた感覚を与え、読者に近い存在としての印象を与えている。そうすることでワトソンには読者の視点が付され、ヒーローであるホームズの類いまれな才能を際立たせると同時に、ワトソンの目を通して読者自身に近い存在としてホームズを認識することになり、結果、実在の人物のような印象を読者は持つことになる。

今回扱った2作は、ホームズ物語の初期の作品ということで、ドイルの恩師ベル博士をモデルとしたホームズが形づくられ、ワトソンはそのホームズの活動を記録するという語り手の役割を与えられながらも、ホームズの才能を引き立たせると同時に読者自身に近い存在のイメージを読者に与える役割

own particular profession, or rather created it, for I am the only one in the world.’
 (The Sign of the Four, 98)

一つの精密科学としての探偵という仕事をするホームズは、自身を世界で一人の存在と称するが、これはワトソンも認めざるを得ない点であり、ホームズにとって好奇心を満たす刺激が不足している状況では、この類いまれな才能の持ち主を、犯罪にその才を使うことに向かわせないためにも、彼にとっての好奇心を満たす刺激の代用として、コカインの使用を、ワトソンは容認しているのである。つまりここでは、ドイルはワトソンの側に身を置き、医学を実用的に実践したベル博士を称賛したように、精密化学としての探偵を实践するホームズをコカインの接種を黙認することで称賛しているのである。

ここまでをみてみると、「名探偵／その凡庸な友人」であるホームズとワトソンに作者ドイルが投影した自己は、一方の存在に偏っているのではなく、双方に分化しているようである。そのうちワトソンに投影されているのは、ヴィクトリア朝の中流階級の人びとが最も大切にたとされる、家庭の感覚を備え、当時の社会に蔓延していた社会的不安を取り除いてくれるヒーローを待ち望み、物語中とはいえそれを体現したホームズを称賛する、という一般読者の視点であろう。その一方で、コカインの常用という一見健康とは正反対のものと思われる行為は、ホームズが優れた才能を犯罪のために用いることを避け、犯罪の代わりにホームズのコカインを満たす代用品となることで、ホームズ自身の健康体に近い精神的な安定をもたらすためのものである。そうすると、コカインの接種はその非健康的な側面よりも、ホームズに健康的な精神状態をもたらすものとして機能しているといえる。さらに、健康のためにスポーツを实践するというドイルの考え方は、社会の悪に立ち向かうヒーローであるホームズの側に付されたのである。

結論

「名探偵／その凡庸な友人」という人物設定を用いて、その凡庸な友人に語りを担わせることを、初めて用いたのはポーであるとされる。その後、ドイルはこの形を用いてホームズ物語を書いた。しかし、ウーズビーが、ドイルはポーから出発点として細部を借りてきたものの、ポーとは違う結果をも

He[Holmes] was quiet in his ways, and his habits were regular. It was rare for him to be up after ten at night, and he had invariably breakfast and gone out before I [Watson] rose in the morning. (*Study in Scarlet*, 18)

というホームズの規則正しい生活がうかがえる描写に対して、

... , that I[Watson] rose somewhat earlier than usual, and found that Sherlock Holmes had not yet finished his breakfast. The landlady had become so accustomed to my late habits that my place had not been laid nor my coffee prepared. (*A Study in Scarlet*, 21-22)

というように、ワトソンはめずらしく早起きしたために、自分の朝食の支度が整っていない様子が述べられることで、自身の不規則な生活習慣をここで垣間見せている。さらに健康の面に関しては、ワトソンは従軍中の不慮の事故といえども、肩を負傷しており、“my[Watson’s] nerves are shaken” (*A Study in Scarlet*, 17) というように神経が弱り、健康体であるとはいえないようである。これらの描写から判断すると、ドイルの理想とした健康とその手段でもあったスポーツとの関連は、ワトソンの側よりもむしろホームズの側に反映されているようである。

しかし、『四つの署名』の冒頭と結末で示されているように、ホームズは、コカインの常用者なのである。現代であれば、法に罰せられるこの行為も、当時はまだその依存性が広く認識されておらず、違法とされていなかった。しかし、医者のだイルであればその負の側面を知っていたであろう。それにもかかわらず、ドイルはホームズにコカインを接種させている。それに対し、この光景を記録するワトソンは、医者としては抗議するものの、ホームズが注射を打ち終わるまでは、やめさせようとしなない。しかし、ホームズは言う。

‘My mind,’ he said, ‘rebels at stagnation. Give me problems, give me work, give me the most abstruse cryptogram, or the most intricate analysis, and I am in my own atmosphere. I can dispense then with artificial stimulants. But I abhor the dull routine of existence. I crave for mental exaltation. That is why I have chosen my

する記述が省かれていることは、作者が自伝の中で自身の親類について語る様子とは異なることから、親類に関して作者の自己投影がなされていないと考えられる。

だが、ワトソンに限ってみればどうであろうか。『緋色の研究』の冒頭においてワトソンが、医学の学位をとり、異国での医療活動中に熱病に倒れる、と述べている点からは、作者ドイルと似た経歴を持っていることが読み取れる。廣野は「そういう点からは、作者は探偵よりも、むしろ語り手、つまり探偵を眺める普通人のほうに近い立場に、身を置いているものと推測できる」（『ミステリーの間人学』99）としていることから、自己投影の要素が見てとれる。さらに、『四つの署名』の結末部分で、ワトソンはモースタン嬢との結婚をほのめかしているが、身内に不運のあった自分（たち）のクライアントであった女性との結婚に至るという点を見ても、ドイル自身、自分が診断を行なうも亡くなってしまう患者であった少年の姉、ルイズ・ホーキンスと結婚しているように、ドイルはワトソンの中に自分を重ねているようである。

これらの点から、作者は物語全体としてワトソンにドイル自身を重ねていることは確かなようだが、ドイルは一貫してワトソンの方のみに自身を重ねているのであろうか。作者ドイルは、『わが思い出と冒険』の中で、「スポーツの思い出」という章を割き、クリケットやボクシング、フットボールなどに関して述べているが、『緋色の研究』でワトソンがホームズの知識や能力を一覧表にまとめた中で、“Is an expert singlestick player, boxer, and swordsman” (*A Study in Scarlet*, 21) と記している。この点に関し、富山太佳夫は「すべて一対一で相手と対決し、作者の理想とするスポーツ精神が十分に発揮される種目である」（『シャーロック・ホームズの世紀末』194）としている。そうすると、作者ドイルはホームズの側にも写されているようである。さらにドイルは、「思い返してみると、私はスポーツに熱中した時間というものについて、何の後悔も残っていない。それは健康と力をもたらし、なによりも心のバランスを与えられたことである」（『わが思い出と冒険』318）という。富山もドイルの、健康とスポーツの関連について『シャーロック・ホームズの世紀末』で述べているが、この関連は、物語の中のホームズにも当てはまるようである。この健康に関する面について、物語中での、

る相手、信頼できる相手なのである。ドイルがワトソンに与えた自身の医者としての姿は、ドイルが師事したベル博士のような、科学の実用性を示す存在としてではなく、ベル博士のような存在のもとに寄り添う立場に身を置き信頼を得ながら観察を行い、ホームズの功績を語る、語り手であるようである。

2. ワトソンに映されたドイル

作者ドイルは、ホームズ物語において、「名探偵／その凡庸な友人」という人物設定を用いているが、物語を通してこの設定は一貫しており、『緋色の研究』、『四つの署名』でもこの設定が用いられている。物語中で中心となるこの二人であるが、二人の人物を物語に設定していることから、作者ドイルは彼らのいずれかに自身のすべてを投影しているのではなく、平等にはなくとも、自己を二分し彼らに投影していると考えられる。しかし、後の作品において状況は変わるものの、物語の当初においては二人に共通した面も見られる。“I[Watson] had neither kith nor kin in England, and was therefore as free as air” (*A Study in Scarlet*, 14) と作品の冒頭で自身の境遇を述べているワトソンに対し、ホームズの方はこの二作品中、自身の親類に関する描写はない。二人は、共同で部屋を借りるという利害が一致し共に生活することになるのだが、それ以前の彼らは二人とも未婚の身ではあっても、親類との関わりに関する情報が皆無という点に関しては、「ヴィクトリア朝の中流の人びとが最も大切にたとされる〈家庭〉の感覚」(『シャーロック・ホームズの世紀末』19)を欠いているように思われる。身寄りのない独身という共通項を持ち、共に部屋を借りる相手を探している状況までは二人とも似ているような面があるが、ワトソンが旧知の人物であるスタンフォードを介してホームズと出会う場面から、二人の人物設定の構図は明確になっていく。しかし、二人がこの家庭の感覚を欠いている点を、作者ドイルの自己投影とみるのは難しいように思われる。ドイルは自伝『わが思い出と冒険』において、自身の生い立ちから、晩年の心靈学への熱中までを回想録として語っているが、その冒頭で彼は、風刺画家としてロンドンで評判を得たジョン・ドイルを祖父に持ち、パンチ誌の挿絵画家として活躍したりチャード・ドイルを叔父に持つ家系であると、誇らしげに語り始めている。そうすると、この段階では、ドイルによってホームズ物語においてホームズとワトソンの親類に関

「この事件で私は自信を得たが、もっと重要なことは他人の信頼を勝ち得たことだった。」(『わが思い出と冒険』37) さらに彼は捕鯨船の船医を含め、医者として助手のような立場で人に仕える経験を度々している。ベル博士のもとの経験もそうである。そのような場合に必要とされるもの、それが、このエリオット医師のもとの経験において学んだ、人の信頼を得るということであるとしたら、これはワトソンに医者としてのドイルが写した姿ではないだろうか。ホームズ物語において、なかなか他人に自信の感情を表さないホームズも、ワトソンの前では感情を表し、笑うという場面がよく見られる。

‘I shall never do that’, I answered; ‘you have brought detection as near an exact science as it ever will brought in this world.’

My companion flushed up with pleasure at my words, and the earnest way in which I uttered them. I had already observed that he was as sensitive to flattery on the score of his art as any girl could be on that of her beauty. (*A Study in Scarlet*, 34)

ワトソンからの賛辞に対して、思わず顔を赤らめており、他にも、

The instant he entered I saw by his face that he had not been successful. Amusement and chagrin seemed to be struggling for mastery, until the former suddenly carried the day, and he burst into a hearty laugh.” (*A Study in Scarlet*, 41)

といったようにワトソンを前にして笑っているのである。“Detection is, or should to be, an exact science and should be treated in the same cold and unemotional manner.” (*A Study in Scarlet*, 98) というホームズにとって、自分の探偵という仕事に関する事柄からは、感情的なものが取り除かれているのであり、女性に対する姿勢においても、ワトソンがモースタン嬢に惹かれ後に結婚するのとは対照的に、理性を邪魔するという理由で恋愛を排除してしまう。そのような中でホームズはワトソンに対し自身の感情を表出させているのであり、それほどまでにワトソンはホームズにとってこころを許してい

さらにこれに続けて、エディンバラ大学は他の大学に比べ实际的で、人生の準備としては实际的であった、としている。当初ドイルの目には、エディンバラ大学で学ぶ医学に関する事柄は、实际的でなかったことになるが、そのような大学生活にあって、ジョゼフ・ベル博士に関しては、異なる認識を抱いていたようである。

それはさて私のあった人でもっとも面白い性格の人はジョゼフ・ベル博士であろう。この人はエディンバラ診療所の医師で、心身ともにきわめて非凡な人だった。(『わが思い出と冒険』 32)

ここでドイルはベル博士をもっとも面白いと評しているおり、自伝の中でベル博士に関する記述は、大学時代の他の教授に関するものと比べ、多くの分量が割かれており、その中にはベル博士と患者とのやり取りさえ記されている。このことから、ベル博士の診断の方法には魅力を感じ、特に実用性を感じていたようである。物語中においても、“it is the most practical medico-legal discovery for years” (*A Study in Scarlet*, 16)、“by this fresh proof of the practical nature of my companion’s theories” (*A Study in Scarlet*, 25)、といったようにドイルが実用性を意識したことばがしばしば目にとまる。しかし、以下に記されるように、このベル博士の像が投影されたのはワトソンではなく、ホームズであった。

私は旧師ジョウ・ベルのことを思い浮かべ、…。もしあの人が探偵だったら、魅惑的なのに組織的でないこの仕事を、精密科学の領域にまでもってきそうに思われた。(『わが思い出と冒険』 92)

ドイルが医者像として抱いたと思われる、実用的な医学を備えた人物はホームズの中に描かれた。ということは、医者という職業を与えられているワトソンには、ドイルの中にあった医者の姿は反映されていないのだろうか。

ドイルは、自伝の中で大学時代の出来事として、シュロプシャー州の町ライトンでの、エリオット医師のもとに助手として勤務していた際の経験を記している。医師が不在時の急患への対応の記述に続けて、次のように記す。

も、教養もあり、活動的で、冒険にも参加する、としている。とすると、語り手でありながらただの傍観者にとどまるのではなく、ホームズと行動を共にすることになることが、ここに見てとれるのである。さらに、ホームズと行動を共にすることは別の意味も持つことになる。『四つの署名』では、テムズ川でボートに乗り野蛮人を追いつめる場面において、ホームズと共にピストルを発砲し、野蛮人の発した毒矢で命を落としかねない状況を経験している。ドイルに語り手としての役割を与えられたワトソンは、常人とはかけ離れた思考の持ち主であるホームズと行動を共にすることで、自身平凡な存在として想定されながらも、一般の読者から見れば平凡とはいえない生活を送っているのであり、この点は、ドイルが自伝を書くにあたって、活動的な、という側面をワトソンに与えることになった理由かもしれない。また、ドイルがワトソンに意図した教養という面においては、ワトソンが医者というドイルと同じ職業を与えられていることに見てとれる。『緋色の研究』、『四つの署名』の二作の中では、ワトソンが医者として診断するという場面が描かれている。ここでは、ワトソンが医者ということばの意味においてのみの職業を与えられただけではなく、実際に診断するという医者の機能性を示すことになっている。教養を備えているだけでなく、実際に用いることができるのである。このように考えると、作者ドイルがワトソンに与えた語り手という役割は、物語中に登場する以上、ただの傍観者ではなく、ホームズと行動を共にし、非日常的な経験を共にし、実際に物語中の人物として機能しながら、ホームズを観察し記述することになるのである。

しかし、医者としてのワトソンを考えた場合に、ワトソンの中に医者であったドイルの姿をそのまま転写することはできないであろう。ドイルは自身の伝記の中で医学を学んだ大学時代を記しているが、入学した頃のことを以下のように記している。

入学したのは一八七六年十月のことで、一八八一年八月に医学生として卒業した。この期間にあきれるほど長きにわたって植物学、化学、解剖学、生理学、その他多くの必修科目を学ぶわけだが、その多くは治療術とは何の関係もないものばかりだ。今から思いおこしてみると、授業の全系統はきわめて間接的で、すこしも実用的なところがなかった。（『わが思い出と冒険』 30）

の2作品は、ホームズ物語が当時の読者から名声を得ることになる『シャーロック・ホームズの冒険』(*The Adventures of Sherlock Holmes*)の以前に書かれたものであるが、おそらくドイルは意図していなかったにしても、この後約40年もの間いわゆるホームズ物語は続いていくことになる。そうすると、ドイルがホームズ物語を書く際にこの時期に作り上げ、後の作品において用いられることになる様々な要素がこの時期の作品にみられると考えられるのである。そのような要素をひろいあげながら、ワトソンの語り手以上の役割、人間性を考えていく。

1. ワトソンに与えられた医者側の側面

ホームズ物語の第一作である『緋色の研究』は、作者ドイルが医者としてポーツマスで開業した後、診断の合間を縫って書いた作品の中の一作であるが、ドイルは、シャーロック・ホームズものを生み出す前の構想の段階のエピソードについて彼の自伝『わが思い出と冒険』(*Memories and Adventures*)で触れている。彼は自身の生涯についてこの本の中で述べているものの、ホームズ物語に的を絞った記述は自伝を構成する31章のうちのわずか1章のみであり、これ以外には他の章で所々触られているのみである。ホームズの構想に関する記述は、この的を絞った章の外でなされており、ガポリオやデュパンに着想を得たこと、大学時代の師ベル博士をモデルとすること、シャーロック・ホームズという名前の由来について書いた後、語り手のワトソンについて以下のように記している。

…名前というものはある程度その人物の性格を暗示するという基本的性質があつて調和がむずかしい。初めはシャープズ氏かそれともファーリッツ氏かとも思ったが、シャーリングフォード・ホームズにきめ、それからシャーロック・ホームズに改めた。自ら功績を語らせるわけにもゆかないから、引き立て役としてごく平凡な仲間を必要とする。教養もあり活動的で、冒険にも参加するし、それを物語るのだ。この見えをはらない人物のためには気どらない単調な名がよい。(『わが思い出と冒険』92-93)

ここに作者ドイルがワトソンに語り手という役割を与えたことが見て取れるのだが、彼はワトソンを平凡な仲間と記している。しかし平凡といいながら

デュパンとその友人、とも関連させて以下のように述べている。

探偵デュパンとその友人、あるいはホームズとワトソンの場合は、「名探偵／その凡庸な友人」という人物設定で、「凡庸な友人」の第一人称による記述という形式をとる。この形式には、①第一人称の直接の語りによって事件の記述に臨場感を与える、②平凡人の眼によって事実関係を読者にも公平に提示し、探偵と読者のあいだの推理ゲームをフェアなものにする、③探偵の内面を自由に覗くことのできない謎めいた領域にし、探偵の超越性を担保する、といった利点がある。（『探偵小説の社会学』9）

語りの形式について、作者が上のような点を意図していたかは定かではないが、読者への効果を考えた際、これらの利点が存在するのは確かであろう。しかし、語り手という役割を担わせるためとはいえ、内田の記述にも現れているとおり、作者ドイルは「名探偵／その凡庸な友人」という人物設定を用いてホームズ物語を描いた。物語の登場人物として描く以上、語り手といえども、物語中の生活において名探偵との関係が生じることは避けられず、事実、物語の中では、ホームズとワトソンの共有の居間、という表現が用いられるほど、二人は関わりの深い生活を送っているのである。そうすると、作者ドイルが、ワトソンに語り手としての役割以上の役割・機能、人間性までもも与えているのではないだろうか。さらに、この「凡庸な友人」である語り手のワトソンは、「医学の学位を取り、異国での医療活動中、熱病に倒れ、帰国して開業医になるなど、ドイルと似た経歴の持ち主である」と廣野が述べるように（『ミステリーの人間学』98-99）、作者ドイルは、自身を重ねあわせるようにして語り手ワトソンを描いている部分があるようにおもわれる。

探偵小説を読む際、読者は「他人をとことん追いつめつつ自らはまったく無傷であるということ」を可能たらしめる文学上の装置」（『ミステリーの人間学』12）である探偵の活躍に注目しがちであるが、ホームズ物語における語り手であるワトソンの、語り手以上の役割についての分析を本論では試みる。その際、イアン・ウーズビーがホームズ物語の正典とされる60の作品を3つの時代に区分したうちの、第1期の作品『緋色の研究』、『四つの署名』（*The Sign of the Four*）を中心に考えていく（『天の猟犬』201）。こ

*A Study in Scarlet*と*The Sign of the Four*にみる Doyleの側面

—語り手 Watson に注目して—

濱崎 建至

序論

アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, 1859-1930) は、エディンバラ大学で医学を学んだ後、医者として開業するものの、その傍らで創作を行い、ホームズものの第1作『緋色の研究』(*A Study in Scarlet*)を1887年に発表することになる。一連のホームズ物語は、「ボヘミアの醜聞」(‘A Scandal in Bohemia’)以降の作品が1891年以降、創刊間もない「ストランド・マガジン」に掲載されるようになると、読者の好評を博していくことになるが、これは作者ドイルの生きた時代の様子を反映していたこともその一因にあると思われる。高山宏は、ホームズ物語が、死の意識の蔓延したヴィクトリア朝の状態にあって、必ず結末のある物語として許容することで死を許容する死の祝祭装置として機能した、としている(『殺す・集める・読む 推理小説特殊講義』21)。また、ホームズへの事件解決の依頼は、当時の最下層社会から上流階級社会まで、イギリス本土と大英国内外の国々といったように幅広い事象を扱っており、これは一つの事象がある特定の現実の中だけでは片付けられず互いに関連しあったものであることを、ホームズがあらゆる現実を行き交う存在として描かれることで示している。このことは、山口昌男が「道化=トリックスターの知性は、一つの現実のみに執着することの不毛さを知らせるはずである」(『知の祝祭』121)という意味において、トリックスターの道化をホームズが演じているとも考えられる。ホームズの演じる道化的役割が、当時の社会不安を取り除く存在として機能したことも、ホームズ物語が広く読まれることになった要因と考えられる。

そのようなホームズ物語にあって、物語はほとんどの作品が、ホームズに常に付き添って観察する立場である語り手ワトソンによる記述となっている。この点に関し、内田隆三は、エドガー・アラン・ポーが創造した探偵デ